

支部だより

発行
東北大学
電気・通信・電子同窓会
仙台市荒巻字青葉
22-1800
電話
発行責任者
守屋 稔
(題字 高野知彦氏)

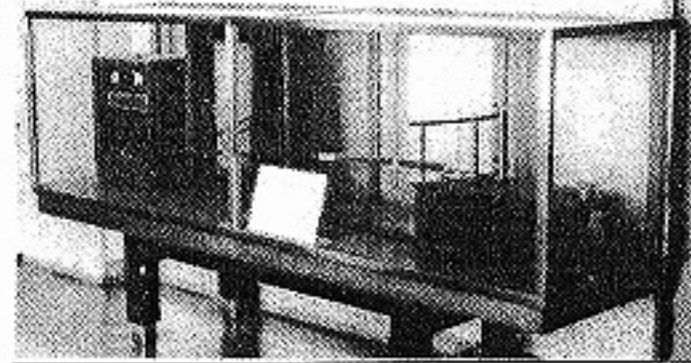
発足にあたって

実行委員長 和田正信

先般同窓会の有志の方々が「八木先生の胸像を母校東北大学に贈呈する事業会」をつくられ、同窓会長の永井先生自ら先頭に立つて基金募集を始められました。この活動は多くの同窓生の共感を呼び、すでにかなり寄附金を御送り戴いております。

その二、この事業会では去る8月2日に第一回の実行委員会を開き、東京からも大谷元夫、吉田稔氏など有力な先輩の御列席を得て、事業をより具体化していくため種々の懇談が行なわれました。その結果はからずも

私が実行委員長を御引受けする任儀と相成りました。微力にしてその任ではないと思いますが、徒に馬鹿を重ね、学内ではいさげん吉い部類の人物となつてしまつたため、お断りする事もできず、御引受け致しました。



その席上胸像以外にもいろいろの事業をしてはどの御意見も出しましたが、私はいまはただ少しでも立派な胸像を作りあげ、母校電気系の象徴として永く大事にされるものにしたといの一心でこの事業に当たりたいと考えており、これ以外のこと

は当分考えないことを申し上げ、御出席の皆様御諒解を得ました。八木先生が東北大学に居られたのは昭和9年までで私が入学した昭和11年にはただ先生の名刺を貼った教授室が残っていただけで、それからでもすでに40年過ぎています。したがって、現在の学生はもろもろ同窓会員のなかにも、八木先生の御話は神代の話としか感じない方が多いことも当然かもしれません。

先生御自身は弟子の宇田新太郎先生を片腕として超短波による通信の実用化、これに関連して新しいアンテナの発明など素晴らしい研究成果を挙げられました。現在テレビを中心として全世界で使われている八木宇田空中線はこのときに端を発しています。先生の播かれた種は芽生え、生長して東北大学の電気通信電子に関する大きな教育、研究の成果と移りました。

私が恩師として八木先生に初めて御会いしたのは、大正八年九月で、私が東北大学工学部に入學したときのことである。それ以来今日に至るまで実に五十有六年の長きにわたり御指導を受けておる。そのうち直接講義や研究指導を受けたのは、僅か二年半である。(當時は大学の卒業が七月から三月への転換期であった)しかも研究指導は卒業論文の約一カ年で実に短い期間であった。その間に多くのことを教えられたが、今でも記憶に残っていることは、独創的な仕事をやることを特に強く教えられたことである。

「八木先生の胸像を母校東北大学に贈呈する事業会」

経過報告

在仙実行委員 佐藤利三郎

光陰矢の如しと申します。が早いもので電気系も仙台工専時代から考えればいわゆる古稀に近く、工学部の電気系学科という点では還暦に近づいて居ります。

創立当時の先生方、卒業生は八十才を越え九十才になんなんと致して居ります。また、電気系は工学部の青葉山移転に伴ない新しいキャンパスに移転したことも

ともあつて卒業生が中心となり何か記念になるものを母校に寄贈したい。創設以来の輝かしい伝統をまもり日日新月异な気持で研究教育を行なつてゆくための一助となるようなものを。同窓会有志からぼつぼつと声がありました。永井会長もその声を重視され、度々同窓生有志の御意見を聞かれましたが、その結果、同窓会総会を開いて同窓会員の意見を聞くことが望ましいが現状ではそれも仲々困難である、ということから、本部役員、東京、大阪北海道、東北各支部長(前

・現)役員(前・現)に東京にお集まりいただき種々意見の交換を行なわれました。その結果「八木先生の胸像を母校東北大学に贈呈する事業会」を発足させるということになりました。会長の意志表明という形ではありませんが同窓会長としてこれまで何もしなかつたので、最初であり最後の母校に対する仕事としてぜひ立派に完成させたいとのこととあります。永井会長は本事業をはじめに当り八木先生の御長男の御意向を確かめられました。次いで鳥山四男、大谷元夫、十合

晋次、宇田新太郎、松前重義、永井健三の各先生方が準備委員代表となられいろいろな下準備作業を進められました。次いで鳥山四男、大谷元夫、十合晋次、宇田新太郎、松前重義、永井健三の各先生方が世話人代表となり作業をすすめられました。その結果、発起人は一千六百九十五名となり鳥山四男、岡部金治郎、大谷元夫、十合晋次、大久保謙、宇田新太郎、松前重義、永井健三の八先生が発起人代表となりました。さらに発起人の中から百二十八名の方々が実行委員となりました。

そして事業会の趣意書を作り六月上旬に同窓会関係及び現旧職員、親睦会OBに送付致しました。次いで実行委員会が開かれ前記発起人代表八名(鳥山、岡部、大谷、十合、大久保、宇田、松前、永井)が実行委員会顧問となり、委員長には現役教授から和田正信教授が推せんされて実行委員長となりました。

実行委員会のスケジュールとしては五十一年三月中旬コンクリート工事、五十一年四月下旬胸像が彫刻家の手下で完成、除幕式は五十一年初夏となる予定であります。

私の恩師としての八木先生

鳥山 四男

当時では一に対する風当たりが強く、大学内の研究陣を擁護して再三諍言をほられるなど、先生の御努力には決して忘れてはいけぬものがあります。東北大学における10数年の先生の業績御骨折りはいつの世になつても記憶していなければならぬことと思ひます。

東北大学では昨年4月、名誉教授の称号授与の規定を改正し、文化勲章受章者文化功勞者になられた元教授の方には名誉教授の称号をお贈りすることに成り、八木先生にも名誉教授の称号をお贈りしました。遅すぎたことではあります。

私が恩師として八木先生に初めて御会いしたのは、大正八年九月で、私が東北大学工学部に入學したときのことである。それ以来今日に至るまで実に五十有六年の長きにわたり御指導を受けておる。そのうち直接講義や研究指導を受けたのは、僅か二年半である。(當時は大学の卒業が七月から三月への転換期であった)しかも研究指導は卒業論文の約一カ年で実に短い期間であった。その間に多くのことを教えられたが、今でも記憶に残っていることは、独創的な仕事をやることを特に強く教えられたことである。

私が東北大学を卒業するときに、卒業の年の三月半ばまでは大学に残り、八木先生の研究室で研究を進めようとしたことになっていたが、三月半ばすぎに理化学研究所の藤井研究室から助手の口が有り、先生は私に是非行くようとのことであった。しかし私は母校で研究した方が気が楽であるので理研行きをしりごみしてしまいました。先生の云われるには「若し私が君であれば自分は進ん

きたことではあります。誇りある先輩を大事にするという意味で私にとつては嬉しいことでした。先生は少し御不快で、往年の御元氣な姿に接することができなくなりました。私たちのこのささやかな事業を通しての先生への敬慕の念が天に通じて、先生が再び元氣を取り戻されることを切に祈念したいと思ひます。

若し同窓会諸君の本事業への御協力を切に望みます。教室棟の中庭に来年は立派で、きれいな先生の胸像ができることを夢みつて。

で理研に行く。君が行かなければこの口は断る」といわれていたので私は元氣を出して理研行きにきめた。その後大正十二年に先生の御推しで北大に行くことになり、大正十三年一月から欧米に留学することになった。先生は私に理研行きを御すすことになった頃から北大のことに御考えになっておられたようである。これで私の生の大体の運命が決つたように思う。

私の就職は転々として変更しましたが、大部分は先生の御命命による転職のようであった。日立中研から北大行きは先生の御推薦、また北大から日立の中研行きも先生の御口添であった。日立中研から北大大行きは大学の御希望によるものであった。東北工学大から武蔵工業大学への転職は、先生が武蔵工大の学長として、是非私に至急に来るようにとのこと、私は東北大学の定年前に武蔵工大に転職することになった。そして先生の部下として武蔵工大の電気工学科の再建の御手伝いをするこ

次に先生の御略歴について述べれば次の通りである。先生が東北大学の教授に任じられたのは大正八年五月である。その後工学部長に就任され、その間に工学部の基礎をかためられ、師研究としては有名な八木テンテナの研究を完成された。一方においては、齋藤

などを会長や事務局などにいたで居りまして、閑居ります。以上簡単に経過報告を申し上げましたが事務局には同窓会からの連絡事項が大変多く(例えば住所・職場の変更、近況の報告、同窓会の注文など)また電話による激励などもありまして同窓会員の力強い支援を感じて居ります。御気づきの

ごさいましたならば何でも結構ですので事務局までご連絡下さい。

報恩会の資金を活用され、東北大学における電気系の学科および通研の基礎をつくられた。これが此度の「八木先生の胸像を母校東北大学に贈呈する事業会」の発足の所以である。昭和九年九月大阪大学に転任され、長岡先生のもとで理学部特に物理学の建設に力をつくされ、物理学教室では新進鋭の物理学者湯川博士、菊地博士等々の学者を養成された。

その後昭和十七年三月、東京工業大学学長に就任され、同大学の改革をなされたことは有名な話である。昭和十九年十二月から二十年五月まで技術院総裁となられ戦時中の我國の技術の企画を指導された。戦後は昭和二十八年五月から同三十四年四月まで参議院議員となられ、昭和三十年五月より同三十五年まで、武蔵工業大学学長に就任され

八木先生胸像建立計画によせて

十 合 晋 次

八木先生の胸像を母校に建立したいという計画は、先生に教えを受けた同窓のすべてが喜びとするところであろう。八木先生御自身のお心持からすると、「そんな事はしてくれな」と言われるのではないかと申す。先生を知るものは、みな、そのように感じるであろう。しかし、あの青葉の聖地の母校の建物、特に電気関係の殿堂にそえて、八木先生の像の設けられる事については、すべての人がそれを極めてもつともな、自然の姿であると思うであろうし、これこそ教え子すべての者に喜びと感激を与えてくれるものと思われ。教

え子の親としての心持に立たれた時、先生もこの子供達の願望を喜んで受けて下さるのではあるまいかと思

う。思えば、この学問の殿堂に、私のような者まで在学できたという事は不思議な位である。貧乏人の家に生まれながら、無謀にも高校や大学の高等教育に突入し

た。その間筆者は先生の御指導のもとで同大学の電気工学科再建の御手伝をした。当時武蔵工大は瀕死の状態であったが八木学長・五島育英会理事長五島慶太郎との名コンビで武蔵工大の危期を救われたのである。その他武蔵工大に原子力研究所を創設した際の両先生の間にいろいろなエピソードがあったがここでは割愛する。目下先生は五島育英会の総長であられる。

最初の部分で述べた、先生と私との関係について考えてみると、私の一生のコースは先生のアドバイスで決定されたようなものである。このことは今では先生に對し心から感謝している次第である。先生は目下御不快で慶応病院に御入院中であるが、一日も早く御全快されんことを祈り筆を擱く。一九七五年八月二日

で行った私にとつて、そこで八木先生から受けた御恩は特別のように考えられる。先生は私をお宅に書生としておいて下さった。共にお世話になっていた齋藤君と共に、毎朝の食事の時にいただいた味噌汁の中には、御母堂が手ずから焼いて下さったお餅が入っていた。腹が少しも保つようにとの、この暖かいお心づくしは、今もって私の腸にしみわたり、一生涯を通じて忘れられないことである。「どうしてこの御恩に報いられるでしょうか」と申し上げた事がある。その時先生は、「何も要らぬ。将来君のような苦学したい者がいたら、その人の世話をし

てやってもらいたい」と言われた。河上先生の貧乏物語の小冊子を下さった頃である。

今、田園生活でのイワンの馬鹿を慕っている私の内には、学者としては人間として八木先生がいて下さると思う。従つて、私のように学問の道で先生

の後を継ぎ得なかつた不肖の弟子にとつても、八木先生の身辺でお世話になった事は、貴重な人生であったと言える。その先生の胸像が母校に建設されるなら、東北大学のあり限り、この学校を守護して下さる表象とされるであろう。母校や近くに在住の同窓諸兄が、このため

数年、工学部中央道路の両脇に植えた樺は、最近ようやく並木らしい体裁を整え、木蔭を作る程度に成長致しました。さらにこの秋には、青葉山移転以降の卒業生各位の御寄付による卒業記念植樹が、同じく中央道路沿いに計画されております。また、今春は、電気応物系の駐車場の整備も行なわれ、青葉山キャンパスの環境は、きわめてスロ

ーテンポではありますが、徐々に整つて来ておりますことを、まず御報告致します。さて、昭和五十年年度の電気系三学科の運営は、竹田教授(電気)が教務担当、虫明(通信)が庶務担当、柴田教授(電子)が経理担当の各主任教授として、共通的な雑用を分担してこれを行なつております。本年度の三学科の運営で、例年と著しく異なる点は、学生の就職事務の進め方であり

ます。御承知のように、今年には九月から就職事務を始め、十一月に選考を行なうという申し合わせになっておりますため、対外的には九月始めまで、全く手をつけていないのが実状であります。昔は学外実習という形で就職先との接触を行なつておりましたが、最近はこのほとんど致しておりません。この様な事情にありま

す。私共と致しましては、就職事務に関する判断で過ちをおかさないよう、大いに気を使つて居るわけであり

にいろいろ奔走して下さつて居る御苦勞、御配慮に深く感謝すると共に、何の役にも立たぬ自分のことを恥しく思います。数えて八十才という高齡による老廢に免じてお許しを乞ひ、御元氣で御活躍の同窓諸兄の御好意に甘えて、お世話をよろしくお願い申し上げます。

虫 明 康 人

は同窓会会員各位の暖かい御支援をお願い致します。つきに、前回の支部だより以後の主な人事異動ですが、今年の二月一日付で、通信工学科情報処理工学講座の教授として、電々公社武蔵野通研に居られた星子幸男博士が着任されました。星子教授は、電気通信の立場での情報処理工学、特にPCM通信方式の権威者で

本学における今後の研究と教育、ならびに運営の面で大いに新風を吹き込んで下さるものと、先生の御活躍が期待されております。一方、通信工学科情報機器工学講座におられた木村教授は、大学院情報工学専攻に新設されたシステム工学講座に移られ、通信工学科には兼任をお願いすることになりました。

このような異動の結果、電気系三学科は現在つぎのような構成になっております。すなわち、電気工学科は、二村忠元、麻生忠雄、村上孝一、安達三郎、竹田宏の各教授と千葉二郎、曾根敏夫、後藤幸弘、大沼俊朗、阿部健一の各助教授および菊地新喜講師、通信工学科は、星子幸男、清水洋齋藤伸自、虫明康人、兼任の佐藤利三郎、同じく木村正行の各教授と、高木相、齋藤恒雄、石留根孝之、兼任の長沢庸二、同じく丸岡章の各助教授、電子工学科は、和田正信、八田吉典、吉田重知、松尾正之、柴田幸男の各教授と、池田俊夫、佐藤徳芳(デンマーク出張中)、針生尚、渡辺英夫、樋口龍雄、星宮望(スエーデン出張中)の各助教授と

なっております。なお、一般電気工学講座には、現在六山武教授と脇山徳雄助教授(米国出張中)が二カ年の予定で出向しておられます。

一方、大学院の方は、電気及通信工学専攻主任の六山教授と電子工学専攻主任の武内教授(通研)がお世話下さつて居ります。この他電気系ではありませんが、電気と関係の深い横型専攻として設置された情報工学専攻では、佐藤利三郎教授が主任としてその創設に努力しておられます。来年度には第三講座として計算機工学講座の設置が期待されております。大学院関係でお知らせすべき事として、修士課程の名称変更があり

ます。大学院設置基準の省令の公布に伴ない、従来の修士課程が、今年度からは博士課程前期と呼ばれることになりました。しかし、実質的には大きな変更はなく、二年で修士の学位を得ることが出来ます。つきに、長年努められた職員の方についてですが、電気系の工場機械工作に専念された桜井喜一技官と電気工学科から一般工学教室に出向して学生実験の指導をしておられた佐藤源之助助手は、去る四月一日付で定年退官されました。本学電気系のため、縁の下での力持ちとして長らく御尽力下さつたお二方に感謝の意を表したいと思

います。最後にりましたが、先日、昭和三十三年電気工学科卒業の同級会の方々と、日本放送協会基礎研究所長樋渡清二氏(電気二十一年卒)の御厚意で、同氏の力作に成る十五号の洋画が母校に寄贈されました。私共はこれを大会議室に飾り、会議室のムードを和げるのに役立たせておりました。ここに御報告し、関係各位に厚く御礼申し上げます。以上、主として三学科の近況を簡単に御報告致します。

以上、主として三学科の近況を簡単に御報告致します。

電気通信研究所の近況

通研広報委員会

八月も末になりますと、虫の奏る交響音楽も一段と賑い、茅も銀の穂をなびかせ、吹く風もどこかひんやりとしてまいりました。同窓会の皆様お元気で各方面でご活躍のことと思います。

電気通信研究所は、現在一九研究部門、付属工場、格子欠陥構造解析研究施設、通信用結晶育成実験施設、事務部門等よりなり、皆様方のご声援によりここまで発展してまいり、この九月二十五日創設四十周年を迎えます。これを記念する行事を九月二十五・六日次のように予定しております。

九月二十五日 研究室案内（電気通信研究所及び電気系学科）、記念式、懇親会
九月二十六日 創立四十周年記念シンポジウム
プログラム

- 一、固体素子（半導体、液晶、磁気記録、超伝導）
- 二、物性（固体、液体、気体）
- 三、波動（音波、電波、ミリ波・サブミリ波、光波）
- 四、情報（計算機ネットワーク、通信方式、生体工学、音声認識、騒音公害の現状）

シンポジウムでは通研及び電気系学科の教授の先生方の発表が予定されており、この記念行事は一年來電気系とともに案を練ってきたもので、電気系学科の協力を得て開催することになっております。この機会に通研創設の状況を東北大学五十年史を資料として少しみてみよう。

電気通信研究所は昭和十年九月二十五日東北帝国大学に付属の電気通信研究所として設置された。しかし研究所設立の機運が生まれたのはこれよりもずっと古く大正末期にまでさかのぼるとみることができよう。

すなわち、大正八年工学科に電気工学科が開設されると、八木秀次教授を中心として電気通信に関する研究が東北大学において盛んになつた。当時電力関係のいわゆる強電工学の研究が中

心であつた我が国において、仙台という一地方都市において、電気通信に関するいわゆる弱電工学が研究の対象としてとり上げられたことは、驚嘆であつたらうと思ふ。王でこそ、電話、ラジオ、テレビジョン等と通信網が発達し、外国へも即時ダイヤル通話が可能で時代であれば、電気通信といつても何ら抵抗は感じられないが、当時の通信の技術や普及度を考えるとき、先輩の諸先生方の卓異な洞察力に敬嘆します。この電気通信に関する研究は、大正十二年仙台の財団法人藤報恩会の多額の経済的支援によつてさらに大きく発展することとなつた。同窓会は八木、抜山、千葉の三教授の「電気を利用した通信法の研究」に対して一百万の研究費を補助し、翌大正十三年には向う五カ年わたり毎年四万円づつの補助を決定しこれを実行した。これがいかに巨額の補助であつたかは、当時建築された現金研のレンガ造りの建物の建築費十二・一万円（坪九〇〇円）より概算してみれば、二十一万円で現在の通研の一号館が建築可能である、ということからもわかるであろう。この経済的援助によつて通信に関する研究が大いに発展し、それと同時に独立の研究所設立に八木教授は再三再四の交渉を学内外で行なつた。

「昭和九年九月八木教授の大阪大学への転出にともない、抜山平一教授が研究陣の指導者となりさらに強力に付属研究所の設置に努力することとなつた。抜山教授は文部省に交渉する際に、研究所の創設による官制上の組織が欲しいのであつて建物、研究施設は従来のもので、すなわち電気工学科の研究室を使用して間に合せるから、その財政的な配慮は無用であると説明した。この説明が文部省に受け入れられ、一方研究実績による関係各方面の支援もあ

つて、ついに昭和十年九月二十五日東北大学に付属電気通信研究所を設置する旨の官制の公布を見るに至つた。（東北 学五十年史より）。以上のようにして「電気通信研究所」という現在においても立派に通用する名の研究所が創設された。発足当時の構成は、所長は東北帝国大学教授の兼補、専任の職員としては助教三、助手六、書記一であり初代所長は電気工学科の抜山平一教授が兼補された。しかし官制上新しく研究所が創設されたからといって、実質的には建物、研究施設等は従来までの電気工学科のものを使用していたので特に変わったわけではなく、建物はその後二十一年にわたり電気工学科のものを借用していた。これは初代所長抜山教授の指導方針、すなわち、限られた経費で能率よく研究成果を挙げるにはまず研究そのもの

同窓生だより

（暇名記）

岩手大学工学部

岩手大学工学部は昭和24年、盛岡高等から大学に昇格してから25年を経過し、設備・内容ともに大いに充実して来ましたが、昭和50年からはさらに情報工学科が発足し現在の学科36講座の構成になっております。この内、電気系は電気工学科電子工学科各4講座、情報工学科1講座（完成4講座）で構成されていますが、東北大学同窓の先生は、助手以上26名中12名の多きを数え、東北大学電気系の兄弟学科の感を強くしています。

私は、昨年4月より岩手大学に転任し、漸く春夏秋冬の一めぐりをおえたところで大内内部の様子もわかり同窓会支部の依頼もありましたので同窓生を中心とした岩手大学電気系の近況をご報告します。

長老格では大森忠夫先生（電8）が居られ現在工学部長として、豊富な御経験

が第一であるとし、建築には重点を置かなかつたためと聞く。

以上にみてきたように、通研は電気工学科から発展的に独立したものであつて、現在の研究分野についてみても、シンポジウムの各項目にあるように、八木、抜山先生時代の電気通信に関する研究にその源をもとめることができるように思う。通研と電気系学科とのこの有機的な協力関係は今日までも引きつがれており、現在でも通研の教官は学部や大学院の講義等に全面的に参加しており、また四年の研修第二における所属研究室の決定や、大学院生の研究室選択には電気系と通研との間には壁がないことは、卒業生の皆様方のよく知ることであります。

最後に同窓会の皆様のご健康とご発展をお祈り致します。

ををかされて教育、研究、大学運営の面で工学部に新風を吹き込んで居られます。

電気基礎学講座は私、杉田（電27）と島田孟先生（電37、博42）、藤原民也君（電46、修48）の3人の同窓生が居り、東北大学在任中から引続き高温プラズマおよびその関連技術の研究を続けています。しかし、何分にも予算的な制約が多く新しい研究室作りには苦慮しておりますが、東北大学や名古屋大学の援助を得て、次第に研究室らしくなつて来ました。

電力工学講座には、佐藤淳先生（電23）が居られ（在盛14年）目下主任教授で大忙しです。御専門は液体誘電体の電気伝導で、この方面では、日本の数少ない専門家の一人として電気学会の専門委員等対外的にも大活躍されていますが、学内的にも各種委員会の委員長や委員をなさつており多少オーバーロードの様に受けられます。

電力応用工学講座には、志田純一先生（電26）がお

られ、以前東北大学にお勤めの三浦守先生や関亨士郎先生とともに非線形磁気材料の応用研究をなさつておいでです。

もう一つの電気工学科の講座は電気通信工学講座で同窓生ではありませんが、佐藤利三郎先生の御指導を戴いている太田原功先生が伝送関係で活躍されています。

電子工学科の電子基礎学講座では、斎藤弘先生がレザール関係、柏葉安兵衛先生（博43）が半導体蒸着膜関係で精力的にお仕事なされておりますが、御両人とも和正信先生の門下生で電気系のホープと目されています。

電子材料及び計測学講座には、一戸英敏先生（電21）と菊池孝先生（電34）がおられ、磁性薄膜関係の研究を続けて居られます。一戸先生は現在、電子工学科の主任教授として、又、電気系のもつて役として教職員学生の信望を集めて居られます。

電子応用工学講座は、大森先生（工学部長）横山隆三先生（電39、修41）、田山典男先生（修43）がおられ、最適制御理論、システムの数理構造、生体工学等幅の広い研究をなさつておられる外、東北農業試験場、東北大学医学部との共同研究など対外的にも活発な活動をなさつておいでです。将来の情報工学科の中核的スタッフです。この講座には又本年6月、日立から菅野文友教授（東北大地物27）が情報工学科のスタッフとして着任されました。

電子管及び電子回路学講座は、岩田純蔵先生が担当され、計算機関係のお仕事をなさつています。

情報工学科は、本年度、情報組織学講座が電子工学科から移り、目下一講座だけですがここには、照井武彦先生（通31）と本年6月東北大応研から着任された藤田勝美先生がおいでになり、情報工学科の建設に奮闘されています。来年度以降は学年進行で情報機器学・応用情報学・基礎情報

学の三講座が出来なつていきます。

以上羅列的に書かれる同窓の諸先生を報告させて戴いたが、カリキュラムが、工学部の他学科にて再編成を始めて情報工学科完成の目標に大改正を行なっております。

御紹介致しまして、当電気系学科は少した系で、それと民族的雰囲気をもつてありますが、予算関係で、ともすれば蛙の中の蛙になりかねない性もありますので、面、研究の面で先輩の御指導とお願いして筆をおく盛岡においでのお立ち寄り下さい。

東北工業大学 関 寅 雄

初 年 北 助 四

科・通信工学科みで学生数も百したが、現在は建築・土木・工学科で、学生総を越える工業単展しています。

設立当時は唯一年々増加し、二に達しています。昨年四月、しでした二代目学成の後任としてある菊池喜充先生は、岩田純蔵先生に代わって大変な学費値上という面するに全学内のコンセに対する先生の努力の結果、大ならず、こので来たことは、で大変幸いでし問題の解決後かしようを再発月から四月まで

ればならないことになりま
したが、その後健康を完全
に回復され、五月からは毎
日元気で執務されています。
なお学長休養中、木村学長
補佐(電15、旧教官)が再
び学長代行を勤められまし
たが、高血圧症のため学長
の復帰と入れかわりに約一
カ月間休養されました。し
かし現在はすっかり回復さ
れ、学長補佐・入試委員長
など全学的な仕事の外に、
私達学科の教授として元氣
で活躍されています。

多数の同窓生のいる私共
の学科は創設当初は電子工
学科・通信工学科として独
立に運営されていましたが
昭和四二年以来、学内の
は電子・通信工学科として
教育・予算・人事等すべて
の面で一体運営されていま
す。学生数は文部省定員は
電子工学科・通信工学科そ
れぞれ二〇名の計二四〇
名ですが、学内では一学年
一クラス四五〇名の六
クラス編成になっています。
講義は二クラス合併が基準
ですが、演習科目など単ク
ラスの講義もかなり行なわ
れています。なお学生の学
科の決定は卒業に際して、
本人の希望によって行なわ
れています。私共の学科は
今春すでに八回生を社会に
送り出しました。学生の就
職も諸先生方のご努力と同
窓生のご援助により順調に
進んできました。しかし昨
今の経済界の激動により、
本年の就職の見通しは大変
厳しく、大勢の学生を抱え
頭を痛めています。

さて、学生の教育に当る
本学科所属の専任教員は、
教授七名、助教授一七名、
講師八名の計三二名で、そ
の大半が同窓生か東北大学
出身で占られています。同
窓生の氏名を紹介すると、
加藤晋輔(電9)、木村瑞
雄、藤野英一(旧教官)、
関寅雄(通27、旧教官)、
佐伯昭雄(通29)の五教授
橋本広一(電14)、半沢直
彦(電22)、松谷栄一(通
27)、大野康二(修32)、
氏家宏(電39)、沢村佐年
(博43)、船田博(博42)、
田頭功(通38)、伊藤英(修
42)、菊地重昭(通37)

宮本義也(修41)、水野尚
(博47)の二名の助教授
と宮崎清則(通41)、安藤
二郎(電41)、鈴木正宜(子
42)の三講師です。なお
この外、非常勤講師として
母校から八名の同窓会員の
ご援助を載せています。
加藤教授は本学創設時、
唯一人の専門担当教員とし
て学科の基礎作りを貢献し
て昨年の十周年の開校記念日
には功労者として表彰され
ました。先生は非常にお元
気で学科の教授としての外
に就職委員会委員長、付属
工場長として、全学的仕事
にも従事しています。関教
授と藤野教授はそれぞれ正
副学科長として協力して学
科の運営に当たっています。
なお藤野教授は計算センタ
ー長も兼ねています。佐伯
教授には会社経営のかたわ
ら、学科の教育研究に尽力
していただいています。

橋本助教授は一時健康を
損われたことがありましたが、
現在は大変お元気で、
学科事務担当として学科全
体の事務を見ておられます。
半沢助教授は学生室委員
広報委員として、元気で学
生の厚生・補導・広報活動
に当たっています。松谷助教
授は学生実験担当として学
生実験の改善に長い間取り
組んでこられました。一段落
しましたので大野助教授に
授に実験担当を引き継ぐこ
とになりました。氏家助教
授と田頭助教授は本年七月
それぞれ「カージオイド複
反射鏡アンテナに関する研
究」(生体用電極の電気的特
性とその応用に関する研究)
により東北大学より工学博
士の学位を授与されました。
これは両人の努力のためも
のであることは勿論ですが
母校の西田教授、松尾教授
をはじめ諸先生のご指導の
おかげと感謝申し上げます。
なおその他の同窓生も全員
元気で教育・研究に従事し
ています。また、会員では
ありませんが母校の通信工
学科に長い間奉職していま
した金野政一氏が昭和四六
年より本学の付属工場の電
子部に助手として勤務し、
測定器の修理や学生の工場
実習の指導に当たっています。

東北放送

ことを申し添えます。
以上簡単に本学の同窓生
の近況を紹介申し上げます。
した。なお今後とも同窓会
員の皆様のご援助をお願い
申し上げます。

今昔、竜
ノ口溪谷にか
かる吊橋を渡
つた経験をお
持ちの方も、
多いであらう。
当時は、人影
も余り無い裏
山であったが
今や、朝夕の
ラッシュアワーには、自家
用車が延々と連なる幹線道
路と化してしまつた。吊橋
はコンクリートの永久橋と
なり、飛込み自殺防止柵も
完備して、すっかり風情が
無くなってしまった。この
金網越しに、遙か太平洋の
彼方を見やれば、右手前方
の山中に、当社の社屋と空
中線タワーが、すんなり、
視界に入ってくる。山の中
に、「威風堂々の白亜の殿堂」
が……と言いたいが、こん
な表現は、当節あまりはや
らない。やはり、自然に調
和して、自然を破壊しない
姿こそ、望まれるから。特
に、この近辺一帯が、「八木
山風致地区」であつてみれ
ば、高一層の事である。

海拔百二十五メートルの
丘陵地に、地上高百二十五
メートルの空中線と、社屋
が並び、周囲には、花壇、
池、ベンチ、等を配してあ
り、憩いのプラザとして、
春秋の連休などには、家族
連れが遊びに訪れるすばら
しい環境である。

土、日曜を除く毎朝のT
BS系テレビ番組で、七時
半前と、八時過ぎの二回、
社屋の屋上カメラが、仙台
の生の風景を全国に中継し
ている。撮像管がビデオコ
ンであるので、画質が不満
であるが、映像の内容は、
風致地区の地の利を發揮し
て、他地区に勝るとも劣ら
ぬものと自負している。屋
上カメラは、プランピコン
カメラに更新される予定で
あり、技術的にも他地区の
ものに見劣りのしない画像
が、視聴者の方々にお届け
出来るものと思う。技術系

ソニー仙台

の職員は、これでやっと肩
身の狭い思いをしなくて済
むと胸を撫でおろしている。
当社の技術系職員は、総
数七十五名程であるが、こ
のうち、電気、通信、電子
の同窓生は、技術局二名、
ラジオ関係三名、テレビ関
係二名の計七名である。

技術局では、菊地幹氏が
昭和二十四年通信で、局長
と検査役を兼務しておられ
る。同局内には、昭和三十
二年電気の佐藤護氏が、計
画部に所属。

ラジオ関係には、昭和三十
三年電気の佐藤良樹、昭
和四十三年通信の大原稔、
昭和四十五年電気の浅谷一
夫の三氏が勤務。

テレビ関係には、昭和三十
四年通信の浅野盛吾氏と
私昭和三十一年通信の浅野
栄の二名がいる。

技術系以外では、総務局
長の今野忠豊氏が、昭和二
十四年電気である。今野局
長は、海兵出身であり、現
在でも野球試合には現役選
手として出場されるなど、
心身共に若さを誇つておら
れる。氏は、報道制作局長
も歴任され、幅広く活躍し
ておられる。

今野局長と同年通信卒の
菊地技術局長も海兵出身で
ある。氏は一貫して技術畑
を歴任してこられた。数
年前に腰を痛められたが、回
復され、技術の元締めを務
めておられる。

なお、大先輩の伊沢平康
氏(昭和十年電気)は、当
社の取締役から、東北映画
制作(株)の社長に就任さ
れた後、現在は当社の特別
社友となられ、お元気で後
進の御指導にあたっておら
れる。

一つ山越しや青葉山キヤ
ンパスではあるが、年に一
度ぐらいいしかお伺いしてい
ない。

恩師、諸先輩をはじめ、
皆様方の御健康を願つて、
拙文を終りとしたい。

仙台から国
道45号線約
13km東、千三
百年の歴史を
持つ史跡のま
ち多賀城市に
あるソニー仙

台には、東北大電通同窓
生が12名、ソニー技術陣の
中核として活躍しています。
まず、ソニー仙台につい
てPRを兼ねて御紹介致し
ます。ソニー仙台は昭和
29年5月、ソニー仙台工場
として設立され、電子部品
であるフェライトの製造を
スタートさせました。その
後、磁気テープ、磁気ヘッ
ドを加え、磁気製品の製造
工場として国内は勿論、世
界的にみてもトップレベル
の技術及び規模を有するま
でに成長してきました。昭
和46年5月、ソニーから分
離独立、ソニー仙台株式会
社と名称を改め、今日に至
つています。

工場創設以来26年、会社
として大きな成長を遂げま
したが、その間にあつて、
技術陣の中心、更には工場
運営の中心になつて活躍し
てきたのが、25年通信工学
科卒の杉本明。人望も厚く
若い者が人生相談にも押し
かけるといった工場の主的
存在でしたが、現在は、V
TRの製造を主業とするソ
ニー幸田(株)へ移り、常務取
締役として活躍中である。

ソニー仙台は、磁気製品の
開発から製造を担当してい
るが、その開発を担当して
いるのが、29年通信卒の奥
村陽彦、技術の最先端を行
くVTR、その中でも、心
臓部とも言ふべきビデオヘ
ッドの開発チームのマネー
ジャー。開発関係では、磁
気テープの方で、35年電気
卒の川村尚古。45年に東京
から仙台へ戻り、優れた技
術で開発をリードしている。
43年電気卒、岩淵喜悦も入
社当初フェライトを手掛け
たが、現在は磁気テープに
取組んでいる。44年卒、丸
田啓二。ソニー本社で磁気
ヘッドの技術を担当してき
ているが、磁気テープを深
く理解する為とついで
現在、ソニー仙台で勉強を
兼ねて開発に従事中。46年
通信卒、若林登。入社以来
磁気ヘッドを担当している
が、最近結婚して仕事も一
層ハッスル。製造関係では
同窓生中最も在仙期間の長
い、33年通信卒、井上大助
長い期間、フェライト関係

の技術を担当していたが、
現在、磁気ヘッド及び特殊
材料製造の課長として若き
を武器に活躍している。36
年電気卒、岡本憲明。入社
以来、本社で磁気ヘッドの
技術を担当していたが、5
年前に仕事と共に仙台へ。
ソニーヘッドの技術をにな
う第一人者。現在、磁気ヘ
ッド製造部門の生産技術を
担当している。

磁気テープ関係では、井
上と同じ33年通信卒の飯野
祐之助が生産技術を担当、
入社以来の磁気テープ技術
を生かして仕事をしています。
37年電気卒、石山弘之。約
3年間アメリカで仕事をし
ていたが、昨年仙台へ戻り
現在、ビデオテープ製造課
長として百人を越す大世帯
をきりもりしている。38年
通信卒、石田勉。フェライ
ト、磁気ヘッドを経て、現
在、磁気テープの生産技術
を担当し、豊富な経験と技
術力で、ソニーのテープの
レベルアップに努力してい
る。39年電子卒、高橋正。
やはり入社以来、磁気テー
プの技術を担当、現在はカ
セットを中心とする技術に
抗戦中。最近、海外へ指向
英会話の猛勉強中とか。最
後の一人は、今年入社朝
倉久男。現在、入社教育の
特訓を受けており、実際の
仕事につくのは来年になる
が、先輩の期待にそつて活
躍しそうな存在である。

同窓生は以上12名である
が、他学部卒業生を加えた
約20名の東北大関係者で、
「こけし会」という名の同
窓会を作り、時には、学校
時代の思い出を肴に盃をく
み交し、時には、技術問題
企業責任といった固い話題
に、口角あわをとばすと云
つたぐあいに交流を深めて
いる。

世界的な技術競争の激化
深刻な不況と我々を取り巻
く環境は厳しいが、東北大
電通同窓生の存在を示す絶
好期と全員頑張っているこ
とを報告し、筆を擱く。